
Killing Lovers

カミキリ丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K i l l i n g L o v e r s

【Nコード】

N 5 1 7 4 Q

【作者名】

カミキリ丸

【あらすじ】

殺人剣を使える平凡(?)な僕と、とある事情でとてもマゾいお嬢様の交流を描く感動の超大作！ いや、半分嘘だけど。

僕とお嬢様の資産家コンビがおくる歪んだ日常をほのぼのを抹殺する気で送る奇妙な恋人・・・恋人だと思う、きつと。うん、恋人達の学園生活です。

第一話 これが僕らの出会い（前書き）

ついやってしまった、今でも反省は出来ない。

もうひとつのゲーム内の話と平行してこちらは空想の学園生活をお届けします。

こっそりもうひとつの作品のキャラが出てくる可能性も無きにしも非ず、ですが

こちらも少なからず皆様の暇潰しになれますように。

第一話　これが僕らの出会い

我輩は人である、名前はまだ無い・・・無論嘘だけど。

僕の名前は槌谷・刀弥（つちや・とうや）。

特筆すべき所は何も無い。人込みに紛れれば全く目立たず気付かれない、そんな容姿。

平凡すぎる俺の日常。いや家のことを含めるダウトされるんだけどさ・・・

一応この辺では有名な剣術の先生として稼いでるじーさんや賭博で荒稼ぎしてる親父やら・・・まあそういうことで結構裕福だったりする変な家庭の生まれ。

金目当ての女子から告白されるぐらいには・・・分かってるよ、自分に魅力が無いことくらいは。

得意なことなんてじーさんに習った剣術ぐらいだし、護身術のはずが明らかに殺人術の域にまで達してるから逆に使えないし。

「今日もまた呼び出しかぁ・・・」

「ラブレターだろ、呼び出して言うなよ」

「・・・いつも付き合ってもアレ買ってコレ買ってとかそういうことしか言われない」

「今回は当たりかもしれないだろ？」

「いや、そもそも名前が書かれて無いね」

「はぁ・・・？」

「【お伝えしたいことが有ります、桜公園に4・・・00にきて下さい】
・・・だけ、ハートとか手紙の雰囲気だと恋文だけど」

「アツーじゃないよな？」

「ソレは流石に・・・まあ、帰り道の途中だからいくだけいくけどね。期待しないで」

「はいオツカレーガンバ、じゃあな」



桜を見上げながらベンチに座って相手を待つ。

このシチュにドキドキする男は多いはずだ。

否、ドキドキしない者などいやしない！居るとすればそれは人間不信か恋愛に興味が無いタマナシかだ。

真の漢というものはシチュだけで死ぬるぞ。・・・いや、ホントに相手も女子で恋愛感情もってたらね？

こう、利益目的だけの子が多くて信用できないんだよ、最近。

「あの・・・」

取り立てて何かがあるわけでも無い平凡な、ただの学校からの帰り道の待ち合わせなんてベタだなあ。

学校の体育館裏よりは良いけどさ。まあうちの高校体育館裏は崖の横にあるからそもそも存在しないけど。

あーあ今日の呼び出してきた相手も、またウチの資産目当ての子じゃないだろうなあ、正直毎日毎日飽きてきたんだけど。

「あ、あの・・・！」

「ああ、僕を呼んでたのか。何かよ・・・う・・・？」

振り向いた先に居たのはお嬢様である。

もう一度言う、お・嬢・様である！

更に言えば清楚な白いブラウスにおとなしめなタイトスカート可愛いらしい典型的なお嬢さまであった。――（後ろにメイドつき）

うわーお、まさかのお嬢様？桜の木の向こうに怪しげな黒服も見えるんですけど、あれってSP？

え、待ってください。こんなお嬢様なら資産目当てとかありえない・・・まさかホントに当たり？

「あの・・・？」

「あ、ごめん・・・ちょっと予想外だった」

「貴方が・・・刀弥様、ですか？」

「うん・・・君が、この手紙の人かな？」

「はい・・・」

「何の御用、いやソレよりお名前は」

「・・・？手紙に、書いていませんでしたか？」

「いやいや、場所と時間しかなかったから」

そして彼女はメイドと目をあわせ、しばらく見詰め合った後にこちらを向き、

メイドさんの方が一歩前に出て頭を下げてきた。

「失礼、ソレは私の手配ミス。こちらは高原・叶（たかまがはら・かのう）。私の友人で、高原グループの社長令嬢」

「高原グループ、って・・・」

「流通・情報・サービス産業など、この界限を実質的に牛耳ってる大会社」

「なんかざつくばらんな説明を」

「難しく細かいことまで知る必要は無い、資産家であると理解すればソレで十分」

「はあ・・・」

「ほほほほ、ほ、本日は・・・お願いが・・・ああああ、有りました！」

「叶、落ち着けないなら私が説明する」

「みっちゃん・・・じ、自分で言うから」

顔を真っ赤にして慌ててる様がとても可愛い・・・けれどなんだかとっても置いてけぼりだよ。

僕、主人公で良いんだよね？え、そんなのは居ない？TVの見過ぎ？

「刀弥様・・・あの・・・私、私を」

・・・「を」？私と付き合ってたかじゃないんだ。いや、分かったよ？こんなお嬢様が告白してくることなんてないよね。っていうか僕初対面だし。でも、となると頼みって何だろう。初対面だから逆に読めないんだけど――

「私を、殺して下さい！」

・・・・・・どうしてそうなった？

第二話 私、不死なんです！

「……今何ったこの子。殺して下さい？
人に殺人犯になれというのか、このお嬢様は

「叶、ソレだけでは少し説明が足りない」

「少しどころじゃなく全然足りないね……」

「ああ、引かないで下さいい！！」

「流石にこの年で警察のお世話になることはしたく無いから」

「私たちのグループに掛ければ証拠一つ残しませんよ！

現場の証拠隠滅からアリバイ工作までお任せです！！」

「叶」

「もし捕まってもそんな事実のもみ消し位簡単に！」

「犯した罪は無くならないだろ！！」

「槌谷」

「どうしても貴方をお願いしたいんです！」

「人を犯罪者に仕立て上げようとして……そもそもなんで死にたがる！！」

「……二人とも」

殺して！、断る！と言い争いがヒートアップした所、静かにしていたメイドさんが急に立ち上がり。

「……話を聞け」

スカートの中からデザートイーグル登場、どう考えても平和な日本で装備するものじゃ……
っていか少女の装備するものですら無いよソレ？

・・・あ、ごめんなさい。僕が悪かったから、大人しく聞くから。頭にゴリゴリするのやめて

「少し説明を付け足す」

「ハイ、ドウゾ」

「じつは叶は少し特殊な体質でな」

「特殊？」

「外部からの攻撃では本当の意味では殺せない」

「はぁ・・・？」

「自動再生能力、とでもいうべき超回復があるためだ」

「何言ってるか分からないぞ」

「つまり「半分不死です！！」・・・叶、台詞をとるな」

ぐりぐりと今度は高天原さんに銃口を向けて・・・危ない危ないから！

見てて怖いからそういうのやめて。ハハハ、まさかソレ本物じゃないよね、ただのエアガンだよな？

さっき僕にも突きつけたけど銃弾入ったりしてないよなソレ！！

「み、みっちゃん流石に私でもソレは危ないってば」

「叶なら大丈夫、絶対に死なない」

「痛いのは痛いんだよ！？」

「痛いのは嫌いじゃない、そう聞いたこともある」

「いや、痛いとかそういうレベルじゃないのでは、銃弾」

「槌谷。君はコレが何に見えるかね？」

「実銃以外の何物でも無いと思います、メイド殿」

「否、ただのエアガンだ・・・ただのね」

ふと視線を逸らすと、高天原さんは顔を真っ青にして口をパクパク

させていた・・・

アレ、何かやばいこと言ったかな？

「つ、槌谷君・・・彼女は、メイドじゃなくて、その」

「え、でもメイドの格好してるよね。それも古き良き時代の」

「このメイド服はただの趣味だ」

「私の友達で、従姉妹なので・・・」

「つまり？」

「みっちゃんもお嬢様、です」

「・・・」

「こんな格好だ、間違えるのも無理は無い」

「紛らわしいわっ！！」

「そんな些細な事はどうでもいい、話が逸れているだろう」

「あんまり騒ぐとS Pの方が来ますから・・・お静かに、お静かに・・・！」

くっ、常識的に突っ込んでるだけなのに。

でも言われて見れば・・・あ、なんか木の陰に隠れてたさっきのS Pが懷に手を入れてる。

まさか凶器を出さないヨネ？

「問題無い、下がれ」

メイドさん、鶴の一声。

うわっS Pの人敬礼までして・・・メイドさんの言うこと聞いているよ・・・

見た目からしたら明らかに使われる人なのに。

完全に王者の風格を漂わせてるよ、このコスプレメイド。

「えと・・・それですね。回復能力の所為か、私の身体、定期的

に・・・」

「定期的に？」

「・・・死なないと具合が悪くなり易いようで」

「・・・いや死ぬほうが悪くない？」

「実践して見せましょうか？」

「いやいやいやいや、夢見が悪くなりそうだからやめて欲しい、切実に」

「だが槌谷、君には慣れてもらわねば困る」

「え、絶対慣れたくないんだけど」

「・・・慣れてもらわないと困るんです、今回の頼みと言うのが「これから彼女の定期的な痛みを与える役を君に頼むことになる」・・・と言うことなんです」

「痛みを与えるって・・・要はKill、だろ？」

「はい！貴方の剣の腕ならばきつと気分よく眠りにつけると」

「あっさりと女の子を斬れるかああー！！！！」

「ですから、私は不死身ですし傷一つ残りませんよ！ちょっとしたボランティアだと思って！」

「どこの世界にこんな血生臭いボランティアがある！？」

「君の剣の腕が役立つんだ、問題無いだろう？」

「無い訳が無いだろ！！大体不死身だとか夢物語もいい所だ」

「私はホントに、んむぐっ」

「不死身であることが証明できれば君は問題無いんだな？」

治るとしても女の子に傷を付けるわけには行かない。

此処はのらりくらりとどっちとも取れる返事でかわすしか・・・！

「・・・夢物語でなければ、まあ考えなくも無い」

「問題無いんだな？」

「考えてはみr「無いだろう？」・・・有りません」

すいません、後頭部に当たる硬い銃器に屈しました！！！

け、けれどもしかし、最後の抵抗として条件をつけておくことにする。

「でも今日中に証拠を見せられなかったら絶対に断らせてもらうかな！」

「構わない、帰り道だけでも十二分過ぎるほどの時間がある」

うわ、めっちゃ余裕で返された！

「ちなみに証拠を見せても納得しなかった場合は悲しいことだが君が港に沈むことになるかもしれない」

「昔懐かしいヤクザみたいなのを！？」

「もう、みっちゃん怖がらせすぎです！大丈夫ですよ、そんな事はさせませんから」

「冗談だよ、ああ、冗談ですよ、高天原さん！」

「私のペットにするだけです」

「もっと笑えねえ！誰か助けて！！」

この人のほうがじつは危ない人か、だって自分を殺してとか言うてるもんね！

「嫌ですか？」

「あったり前でしょうが！！誰がペット扱いされて喜ぶか！！」

「では私がペットになります、わん♪」

「僕に何処まで叫ばせるつもりなんだ！！そんな冗談はお断りだあああああ！！」

「冗談ではありません、本気で言ってます！」

「なお性質悪い！」

ホントに首輪つけ始めたよこの子！ちょっと、ソレどこから出した。メイドさんもこの人止めて！！

高天原さんも顔赤くしながら自棄になるの止めてください。ちょっと可愛いけどSPが怖いから！

「私は恥ずかしい秘密（不死）までさらけ出しましたよ、御主人様！」

「シャラップ！御主人様違う！！」

「では旦那様！」

「夫婦どころか恋人ですらないわ！！」

「では恋人になりましょう！」

「そういうのは友人からお願いします！」

「いつかは恋人です！！そのステップは飛ばしましょう」

「飛ばすな！！重要、其処は結構重要だから」

「いいえ、私はもう覚悟完了しました！ハジメテを捧げても良いぐらいに！！」

「落착け、それは孔明の罠だ！！って言うか初対面の男に捧ぐな！！」

「これから末永くよろしくするんですよ？早いか遅いかです！」

「お嬢様な見た目に反して暴走特急の妄想少女かアンタは！！」

「いいから大人しく私の物になってください！」

「ことわり加勢するぞ。いっそキスから熱い抱擁までかわすとい

ぬあつ、いつの間にバックをとったんだメイドのみっちゃん！

ちよつと・・・ホントに離して、今捕まったらこの妄想少女が襲い掛かって・・・あーーーーー！！！！

「んっ・・・♪」

「ーッ~~~~！！？」

ふわりと甘い香りが感じられた瞬間には僕は高天原さんと口付けを交わしていた。

ちよつとどこからかズキュウウンって音が聞こえた気がするけど気のせいだよな。

でも、いきなり襲われた唇に当たる柔らかくて、熱くて、見開いた眼からはろんとして見つめ返す彼女の顔が見えて。

しかもホントに力強くハグしてるから逃げるに逃げられない・・・ハグされてなくても逃げようとしたかは別として。

絶世とは言わずとも十二分に美少女に入るお嬢様からの抱擁とキスを振りほどくなんて僕にはきつと。

あと・・・地味に二人にサンドイッチにされてて背中と胸元が凄く気持ちいいし。

・・・ああ、流されてるなあ。

思考が突発的な事態の熱暴走で程よく蕩けた所でようやく唇が離れた。

そのまま崩れ落ちかけた所をメイドさんに支えられている僕を見て、彼女は唇を舐めてぽつりと一言。

「ご馳走様でした・・・v」

満足そうに微笑む姿も普段なら可愛いと思えるはずが。

流石に襲われた直後でそんな甘っこちよろいことなんか考えてられない・・・滅茶苦茶な恥かしさで。

というかこの子こええ・・・ホントにあっさり初対面の僕とキスしやがった。

「ううう・・・」

「まさに襲われた生娘のようだね、婿殿」

「あながち否定できないところがまた・・・」

「何故ショックを受けているか、私には分からね」

「初めてだったのに！！こんな初キスとか」

「私も初めてでしたよ？」

「アンタは奪う気満々だったでしょうが！？奪う側！！」

メイドさんがにこやかに肩を叩いて・・・いい加減あんたも放して下さい、もう立てますから。

「媚殿、コレも君への報酬の一部と言うことになっている。まだ頼みは受けてもらっていないが・・・要は前払いだ」

「報酬として渡していい物じゃないよ、っていうか、むしろ奪われたよ今！」

「今は叶に奪われたが・・・君に役立ってもらう時は叶は何も着れないんだ、いつか襲うと保証できるね」

「何で全裸？！」

「服が汚れたら勿体無いだろう？また作らせても良いが時間の無駄だ」

「ああ、確かに・・・でも僕が襲うわけない！」

「このヘタレが！」

「ヘタレじゃねえええ！！！！」

「全裸の美少女だぞ？何故襲わん！」

「変なキレ方するな、なおさら収集つかねえよ！？」

滅茶苦茶、楽しそうな顔してるけどわかってやってるだろ、アンタは！

「分かりました、私でご不満であればみっちゃんもつけます！」

「どんな風に連想したらそういう方向に話が転がる！？」

「ふむ、君のようなヘタレに身を任せるのはいささか不安だがコレも友のため、私の身体も好きにするといい」

「アンタは黙ってろ、確信犯！」

「私も割と真面目に言っている」

「私は完全に本気です」

「見た目と中身が比例しないことはよくわかったから少し黙ろうか、お嬢様」

さらに力を込めて拘束してくるメイドさん。

身体を当ててるとかいう以前に間接極め始めてないか、あんた。

「・・・仮に、とはいえ君には人を殺してもらおうわけだ。少しくらいいい夢を見せるべきだろう？」

「仮にじゃなく立派に殺人だ！大体どうして僕が」

「綺麗に死んだ方が痛みも少ないからに決まっている」

「だったらメイドさんの銃でもかまわないだろ」

「身体に大穴を開けたら多少回復に時間がかかるだろう？」

「いや、かかるとか言われても知らんし」

「断面を合わせればすぐに再生する刀剣が一番負担が少ない」

「色々試しましたがけどやっぱり日本刀が一番回復も後の処理も簡単なんですよ」

「・・・後の処理？」

「そう・・・つまり、こういうことだ」

急にメイドさんが銃を高天原さんに向け、引き金を引く。
あまりにあっさりとしたその光景に戦慄する僕をよそに、
バンッ、と想像よりも軽い音が響いて——その延長線上にあるのは
叶の額で——銃弾を受けた高天原さんの体がその場から吹き飛ぶ。

「うおわああああ！？ちょ、おまわりさー！ん！！」

「既に人払いも済んでいるよ。よしんば聞かれていたとしても・・・大丈夫だ、問題ない」

「人を撃っておいで落ち着き過ぎだアンタはっ！？あれ絶対死んでるだろ！」

「そろそろ叫び過ぎでのが痛くなってこないかい？」

「叫ばせてるのはあんた達だっ！！」

「ふむ、どうやらすごく心配されているようだ。かといって私を殴るわけでもなし・・・媚殿はなかなか優しいみたいだ。よかったな、叶」

「っ！！ 頭に穴あいてて返事ができるわけないだろ！！」

人を銃殺しておいてその淡泊過ぎる態度について僕がつかみかかろうとした時、

「みっちゃん・・・せめて前もって何か言ってよ、ものすごく痛いんだから！」

その頭をぶちぬかれた本人が起き上がり、返事をした。



SPとはまた別の黒服の人たちがてきぱきと薬品を撒いたり飛び散った血肉を片づけている最中。

僕は叶さんが撃たれたはずの場所をひたすら触って傷がないかを確かめていた。

「……………今、銃弾が頭を通り抜けてたよな？」

「あんまり撫でられるとくすぐったいですよ……旦那様♪」

「（とりあえず一旦無視して……）傷一つない……メイドさんの手品？」

「否、確かに頭を撃ちぬいたよ。このエアガンでね」

「高威力なエアガンデスネ」

「ははは、まあ手品だと思うのなら自分の体で試すかい、媚殿？」

「謹んでご遠慮させていただきます、媚殿って呼び方もついでに」

何の迷いもなくその場で土下座しながら僕は言う。

我ながら情けないが僕の命は一つしかないからね。

プライド<<越えられない壁<<<自分の命だよ

「呼び名については却下する、反論も受け付けない」

「……横暴だっ」

「美月様」

「ん、終わったか？」

「はい、全て終了いたしました」

「よろしい。後の指揮はお前に任せた、屋敷に戻っている」

はっ！と言って清掃部隊（？）のがたいの良なお兄さんは仲間を引き連れて撤収していった。

……3分程度で綺麗にしていったのか……プロの犯行ですネ。

「さて、話を戻すぞ、媚殿。つまりはこの惨状を見てもらえば分かると思うが銃弾では後始末が大変だね」

「鉛玉ですとお肉と当たった部分の色々が弾けてしまうんですよ、今は頭でしたからちよっとのうしょ「聞きたくない、ソレ以上言わなくていいから、高天原さん！」

「その点、日本刀なら流れでた血の始末だけで済む上、回復までモ
ノの5秒で十分という利点があってだね」

「・・・化け物じみてないか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（に〜〜〜っこり）」

え、何でそこで笑みが深くなる、メイドさん。

ちょっと口が滑ったとは思うが微笑むところか、今の。

「叶、媚殿がもう一度接吻してほしいそうだ。思う存分愛してや」
「僕の言い方が悪かった。超人なんですね、高天原さん!!」

ほらそこ、遮られて残念そうにしない。というかい加減に首輪外
しなさい。

「キスはまたあとでしましょう・・・」

いや、しないからね？

「私のこと、信じてもらえました？」

「あの相当ショッキングな映像を見せつけられて道路が赤く染まっ
てれば否でも・・・」

「そうか？私の調べによると媚殿は殺人剣を習つてるとあるが・・・
一人くらい斬ったりは」

「するかっ!!型を通って爺さんに鍛えられてるだけだよ」

「一匹ぐらい切ったりは・・・」

「・・・・・・・・してない!」

「動物は経験済み、か。良かったな、明日から週に一回だけ人を斬
れるぞ」

「してないから!？それによくねえっ!!」

また叫んでいると、ぎゅっとうしろから誰かに抱きすくめられる。
だれかなんて、高平原さんしかないけど。

「・・・何、高平原さん？」

「叶とお呼びください、旦那さま・・・v」

「はぁ・・・？」

「恋人なら名前で呼んでほしいです」

「いや、恋人じゃないし」

「ではペットに！」

「するかっ！また言い出したよこの人！！」

「嬪殿、ここでひとつ言っておかなければならないことがある」

「何だ、この忙しい時に！むしろメイドさんも早くこの人説得してくれ」

「大事な話だ、良く聞いてほしい。ここで私が叶の父に、娘の初キスが下劣な男に奪われた。と報告すれば君を消しにうちのお抱えの特殊部隊が出てくる。確実に」

「奪われたのはこっちだぞ！？」

「いつの世もこういう事では女性が強いのだよ、ケダモノ君」

「く・・・」

「うふふ、だ・ん・な・さ・ま♪」

「何、悪い取引でもあるまい。ただ少し血生臭い仕事があるだけと思えば」

「それ躊躇うに十分すぎる理由だよな！」

「それと叶は暴走はするが割と尽くすタイプだ。親も高平原グループのお偉いさん、つまり玉の輿でもある」

「スルーすんな！？」

「だが受け入れられないのであれば仕方ない。叶の秘密も知られてしまったことだし、部隊を呼んで君を消すしかないな」

「・・・叶さん、これから末永くよろしく願いします（キリッ）」

ほんとに携帯をかけ始めたのを見て僕はあっさりと態度を変える。
何度も言うが、僕の命は一つだ!!

それに・・・まあ・・・うん、考えてみれば叶さん可愛いし。
週に一回でいい・・・ならリターンの方が大きい、かな？

「懸命な判断だよ、婿殿。これで私も君のものになるわけだ」
「絶対からかわれるだけだよな！」

「旦那様、これから私と・・・」

「なんか脅されたようで納得いかないけど、引き受けた以上はよろしくね」

「はい！不束者ですが、死が二人を別つまで末永くよろしく願いますv」

「ははは、死じゃ僕ら別けられないと思うけど・・・」

第三話 いや、正直ソレはないわぁ

「ただいまっ」と

ぎゃあぎゃあ騒いだ帰り道とは対称的に物静かなうちへ帰宅。

昔はうちも立派に名門だったらしいけど、いまでは道場だけが立派な家になってしまっている。

婆さんは先に向こうに逝っちゃってるし母さんもギャンブル好きな父さんに呆れて出て行った。

まあ、だからどうだって訳でも無いけど肉親から異性との付き合いが皆無な僕はどうにもああいふのは疲れてしまう。物凄く緊張するんだよね、完全に金目的だと分かっていると逆に対応も楽なんだけど。

「ああ、道場いかないと。日本刀まだ綺麗だったっけ・・・？」

じつはメイドさんにも言われたが殺人術レベルの剣術の取得の為に帰ったらすぐに爺さんと真剣で稽古をつけることが日課になっている僕。

この真剣というのも自分で鍛えて身体に馴染みやすいように・・・とか言われて鉄の塊から僕が打った物で、正直滅茶苦茶傷みやすい上にすぐにボロボロになる。

爺さんの打った日本刀は全然刃零れもしないというのに・・・ばかあまだまだ未熟者ですよ、ええ。

「・・・あ、違う。そもそも今日は夜練か」

今日はあの二人と漫才をしてたせいでいつもより遅れてしまったが、そういえば爺さんも表向きに道場で護身術の指導をする日だったこ

とを思い出し、ぐったりと布団に身を預ける。
まだ爺さんも門下生の稽古つけてるところだろうし、一眠りして
かたても十分に間に合うだろう。
二人のテンションに引きずられて疲れたし……少しだけ、お休
みー。



就寝中の婿殿の部屋を突撃してみた。
理由は特に無い、ただ帰り道でわかれたと思ったら家に居る！？と
言う古臭いドッキリをかましてやりたくなっただけで。

参加者は私と叶、そして婿殿の育ての親であり婿殿を私達に紹介し
てくれたお爺さまを交えた三人。

何の遠慮も無くドアを開けて中を覗きこむが、机に筆筒、ソレと布
団（真横に無造作に日本刀）しかない殺風景な部屋が出迎えてくれ
た。

私のほうが驚かされたぞ。なんでこんなにも何も無いんだ、婿殿。

「……しかし、ぐっすり寝ているな。油断しすぎだろう、婿殿」

「コレでも最低限は鍛えておるよ、殺気を放てばすぐに起きようて」

「ふむ……爺殿、殺気を放たずに突っ込んだ場合はどうなる？」

「反射で撃退せんとも限らんが、まあまだ未熟じゃ。お主なら
問題は無い」

「いや、私ではなく……叶がな」

布団の上で丸くなって眠っている婿殿を見やり、隣に立ってぷるぷ
ると震えている叶を見やる。

今にも飛び掛っていきそうな雰囲気をかもし出している為、先程自

らつけた首輪を引っ張ってとめておく。流石に寝込みを襲うのは不味いからな、意識があれば全責任を婿殿に押し付けられるが。

「・・・みっちゃん、ダメ？」

「ダメだ」

「・・・無防備でこんなに可愛いんだよ？」

「同意はするがダメだ」

「据え膳食わぬは女の恥です」

「据え膳でも無い上にソレは男だ」

「ぶっちゃけますと凄く襲ってしまいたいです」

「そういう本音はせめて爺殿から隠れていえ！」

「襲われる方が未熟なのが悪いんじゃ、構わんよ」

「お爺様、話が分かりますね！」

「爺殿、叶が調子付くことを不用意に言っは・・・！」

「みっちゃん・・・お爺様からの許可も出ましたから離してくださいよ〜」

「離したらどうする？」

「今此処で旦那様と結ばれます」

「ダメだな」

「なんでですか〜！！」

「・・・少・し・は・恥・ら・え〜！！」

「恥らってる間に取られたら後悔で死ぬよ、私死ねないけど！」

「全く・・・ハグとキスだけなら許可しよう」

「みっちゃん、ソレ生殺し！？」

「それ以上は本人から許可を取れ、そこまでは無許可でいいが」

「・・・お主ら、刀弥もそろそろ修練の時間じゃ、もめておったら勝手に起き出してきよるぞ」

「む、そうなのか・・・よし、叶。いそいで寝起きドッキリを敢行

するぞ！

キスとハグなら私も邪魔立てはしない」

「むー・・・今日は其処で妥協しましょう」

「ワシは先に道場におる、騒ぎがすんだら急ぎこちらに呼ぶようにな？」

「はい」

「30分もあれば済む、終わり次第すぐにそちらに送り届けよう」

そのまま爺殿退場。

本当は・・・此処で居なくなれると叶が暴走した場合止めるのが大変なことになるのだが。

それともコレは爺殿的には最後までしてOKと言う意味なのだろうか。

「みっちゃん、はやくはやく！」

「叶、騒ぐと婿殿も起きるぞ」

「・・・ん、と」

「ほら、そっち側から布団に入れ。私はこっちからサンドイッチするから」

「みっちゃん背中が良いの？」

「叶が背中側ではキスできないだろう？」

「まあ、そうだけど」

「後は、婿殿をからかうためだ」

「うん・・・？」

「いいから、早く抱きしめてやれ」

「はい、遠慮なく！」

叶がぎゅっとハグする寸前、婿殿の腕が布団の中から日本刀に向けて即座に伸ばされる。

予想されていなければそれで十二分に侵入者を撃退できただろうが・

・甘いぞ、婿殿。

「手を伸ばす位置まで計算済みだ。刀は既に移動済み、それに……」

「ぎゅうー！」

「っ……なんだ……敵か!？」

「叶です、旦那様！」

「おまけで私だ」

「ッ何処から入ってきたぁー!!！」

「普通に玄関からだ、爺殿から歓迎されたぞ」

「はい、襲っても良いと言われましたから……こうやって一緒にさせていだきたく」

「僕が許可してない!!！」

「……婿殿、爺殿から伝言だ」

「婿殿違う。んで、じーさんがなんて？」

「未熟者め、だそうだ」

「あのじじい!! 叶さん、離れて! ちょっと叩きのめしに言うてる!!」

「もう一つ言わなければ成らない事があるのだが」

「急いでるんだよ、なにさ!」

「寝ながらにしていきなり女の腕を掴んだ挙句、布団に引きずり込もうとするのは関心せんな」

「誰がいつそんなことしたかッ！」

「今現在進行形で婿殿が、だ。私は刀では無いよ、君」

「……は？」

「旦那様が握っているのは、みっちゃんの腕ですよ？」

「!?!? え、あ、いやコレは誤解だ!?! 政府の陰謀だ! M◎Rはど

こにいる!!」

「叶が斬られぬ様に刀をどけて隣に寝転んでいたが・・・まさか此処まで積極的に求められるとは」

「ねえよ! 事故だ事故! 僕の意志一片も入って無いよ!」

「旦那様あゝv」

「叶をくつつけたままという、なんとも説得力の無い説明をありがとう婿殿」

「叶さん、だから離れて!!」

「みっちゃん、あと何分ある・・・?」

「ふむ、15分程度かな。いけると言えはいける時間だろう」

「10分で十分です。人払いよろしくお願いしますね?」

「何の話をしてる!?!」

「何って・・・ナニですよ?」だな?」

「ハモるな!」

「きせーじじつは大切だと聞きましたから今日中に終わらせておこうと思ひまして」

「頭の中でその文字が漢字で浮かぶようになってから出直してきなさい」

「既成事実って大事ですよね・・・?」

「相手の意見を尊重しろ、って言うか知ってるなら最初からちゃんと言え!!」

「では婿殿、私は終わるまで外に居るから終わったら声をかけるよ
うに」

「何も終わるような事はしない! 断じて無い!!」

「聞こえるな、君の人生が終わる音が」

「終わる物が壮大すぎじゃないか!?! 何が有って終わるの、僕の人
生」

「結婚は人生の墓場と言うだろう?」

「結婚を勧めておいてその言い方はあんまりじゃないか!?!」

「後片付けは私が受け持つから安心したまえ。ではごゆっくり」

「放っておくな、助けてー！！！」

「男は自力で助かるものだよ。それに私は叶の幸せを優先する」

「叶さんが汚れるぞ、それでいいのかー！！」

「好きな男になら構うまい、婿殿が期待を裏切れば私が処刑するまでだ」

「こわっ！って言うか僕の方が処刑されるのか！！」

「じゃ、みっちゃんよろしくね！」

「安心して任せるといい、ただし次は私の番だぞ？」

「はーい、その時はSPメイドもつけるから私のことは気にしないでいいからね」

「男の部屋で変な相談するなー！！！！」

・・・そう言ってメイドのみっちゃんはホントに出て行ってしまい、僕は叶という名の肉食獣と一人で戦うことになってしまった。

「覚えてろよ、メイドのみっちゃんああー！！ん！！」

そういえば僕、彼女の名前ちゃんと聞いて無いなあ。
流石にただみっちゃんとは呼び辛いんだけど。



「いるんだろう爺殿？」

「ふむ、気付かれておったか」

部屋の外に出て廊下の先に声をかければ、爺殿の姿が現れる。
ちなみに中で行われてるであろう婿殿と叶の争いはこの際意識から

シャットアウトさせてもらう。

他の所にも叶に伝えていないだけでS Pは構えているしね。

「気付かずとも推測は出来る。

叶だけであればともかく、私まで近くに居るまま貴方が此処を離れるわけが無いからな」

「・・・お主らも、中々大変な生き方をしているようじゃな。

殺気は抑えておったつもりじゃが、失敗しておったか」

「強くないと死にそうになる程度、少し大変って所さ。

人の顔を見た途端に疎んでおいて殺気を抑えるも何も無いとは思うがね」

「・・・そうじゃな、お主の身体にはこの日本において少々、人の血の匂いが染み付き過ぎておった。

そのことに驚いてしもうてな」

「ああ、殆どは叶からの返り血だけれど私も一応はお嬢様。

人質に取られても独力で殲滅するくらいの実力を持つ必要があったのさ」

「・・・ワシでも勝てぬほどにか？」

「見たところ、そうだな。叶に手を出さねば相手にもせんが・・・命を捨てる気であれば・・・刺し違えられぬことも無いと思うぞ、

爺殿」

「ワシの方が格下か。しかも他にも手練がおるんじゃないろう？主一人で警護になどつくまい」

「ソレは無論、けれど叶以外の守りは全て後回しだ。私が殺された所で見向きもせんさ」

「ワシにも孫にも危害を加えねば文句は言わん。殺人狂でも戦争屋でも無いのならば構わん。

刀弥のためにも、鍛冶弟子のためにも余計な事はせんよ」

「今そのお孫さんが叶に襲われているが」

「そのくらい、あしらい切れんのならば食われてもしょうがあるま

い」

「・・・話が分かるな、爺殿」

「叶のお嬢さんなら嫁に来て、婿に取られても問題はないじゃろ。少し死に慣れておるのが玉に傷じゃが」

「私も隙を見て婿殿を頂くが」

「好きにせい、お主は叶のお嬢さんを裏切らんじゃろ？」

「当然、婿殿に関しても私の立場としては妾となるだろう」

「妾とか要らないから!!」

「旦那様、暴れないで下さい・・・」

「服を脱ぐな脱がすな入ってくるな!!」

「胸元も逞しいですね・・・流石に運動している人は違います」

「恥ずかしいから見るなーーー!!」

「うむ、妾となるだろうな」

「まるっきり中の叫びを無視しおったな」

「問題無い。続けるが、私としても叶の邪魔をしないのであれば危害を加える理由も無い」

「今刀弥は全力で叶お嬢さんから逃れようとしておるようじゃが」

「爺殿、昔の人は言いました」

「なんじゃ？」

「嫌よ嫌よも好きのうち」

「そんなんじゃ無いんだってばーーー!!!」

「時間がありませんから・・・動かないで下さい・・・!」

「止めろシ◎ッカー! 僕にはまだそういうことは早いってば」

「なら天井の染みでも数えていてください、大丈夫ですよ。」

「どっちも初めてでも痛いのは私だけです」

「そういう事を言ってるんじゃない!!」

「・・・・爺殿」

「なんじゃね」

「叶は思い込みも強く、依存度も高い・・・今まさに扉越しのこういう嫁だが。」

コレからよろしく頼むことになる。刀弥殿だけでは危ういかも知れんからな」

「・・・なんのかんの言うておるが、刀弥もそこそ楽しそうじゃしな。」

よほどの事が無い限りはよろしくしておくわい」

中の騒ぎに一気に氣勢をそがれ、半ば呆れ顔で老人と少女は顔を見合わせる。

「こんな二人ならそうは変なことにはならないと思うがね」

「唐突に上がりこんだ家で跡取りを抱くとは十二分に変じゃがなあ」

「ああそれ、叶にしてはまだマトモだから」

「少し先が思いやられるのう・・・」

「【向こう】の管理が無ければ私一人で全て片付けられるんだが、ね」

「向こう、とな？」

「ちよっとしたゲームの話さ、GMのサポートをしていてね」

「ふむ・・・よくは分からんが頑張るんじゃぞ」

刀弥と共に過ごしているとは言え流石にゲームは嗜まない老人は少し首を捻り、曖昧に応援し軽く流した。

「ああ、そうそう。刀弥、今日の修練は中止にするからの。しっかり頑張るんじゃぞ」

「何を頑張れって言うんだジジィー！！！！」

「お爺様も応援してくれています、此処は一発しこんじゃいまし

第四話 私達は嘘は言っていない

虫も木々も寝静まるような・・・深夜。

どうも、じーさんは修練中止だと言いましたが身体を動かさないことにはどうにも落ち着かないため、こんな時間に一人道場で黙々と修行中、刀弥です。

・・・叶さん？ああ、彼女なら当身で気絶させて美月さん（みつちやん）に任せてきたよ。

貞操の危機は何とか回避したさ・・・普通危機は男じゃなくて女の側に迫るもんだらうと思うけど。

「婿殿、少なくとも明日の朝までは平穏になるぞ」

「あ、みっちゃんおかえり」

「・・・君もそう呼ぶつもりかい？」

「メイドのみっちゃんの方が良いのか？」

「いや、普通に美月で良い」

「はいはい、覚えてる限りは美月さんで。で、叶さんは？」

「当身による昏睡からそのまま睡眠に移行したようだ」

「そっか・・・まだ起きてきたらどうしようかと」

「その点に心配は要らない、しっかり眠っているよ。私が更に駄目押しをしておいたからね。」

「それで・・・すまないが、今は婿殿の布団を借りている」

「・・・それ、僕が眠れないんじゃないか？」

「眠りながら鼻を利かせて婿殿を探し回っていたんだ、婿殿の布団を犠牲にするのもしようがないだろう」

「犬か、叶さん」

それならまだ躑けも楽なんだけれどね、そういつて美月さんは道場

の壁にもたれて座りこんだ。

「しかし媚殿、流石に身の危険を感じたからと言って女性に手をあげるのとは感心しないな」

「全力で突き放そうとしても微動だにしない少女が襲われている男子学生より強くても？」

「ああ、強くてもさ」

「・・・じゃあどうやって引き剥がせばよかったって言うんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい！！」

「媚殿。今は深夜だ、叫ぶんじゃない」

「うちは広いからこのくらいじゃじーさんも起きないさ。で、何の案もなく頑張れと？」

「爺殿は気づいてると思うが・・・」

「・・・実はな、媚殿。叶の場合ならソレは簡単なことだな」

「お、さすが。弱点を知ってるんじゃないか」

「・・・相手を・・・甘やかす」

「は？」

「自分から特攻して行くのは慣れていても逆に手を出されるのは慣れていない」

「待て待て待て、OK それはつまり・・・」

「媚殿から仕掛けろ」

「やりたくないから逃げてるんだろーがー！ー！」

「抵抗して最後まで食われるか多少の犠牲を払うかの違いはあるぞ、媚殿」

「嫌な選択だ！」

「つまり後ろから抱き寄せて愛の言葉でも囁きながら揉んでやれば一発だ」

「愛の言葉とか囁いて手を出したらソレこそ次から叶さんのアタツ

クが強くなりそうなんだけど
あと揉むってなんだ!？」

「胸」

「あーあーあー、なにもきこえない!」

「ふ、ギリギリ貞操を守りながら恋が芽生えるのを待つか、先に関係を持ってから恋をするかさ」

「お前は何を言っている!!」

「叶に気に入られた以上、君の選択肢は結婚しない限り闇に葬られるか地下で飼われるかだ」

「あーあーあー!! 僕は何も聞いて無い!」

「地下で飼われていたら私もたまに会いに行こう。蔑みにね」

「最悪だな!」

「ああ、罵りながら抱くよ」

「実は叶さんより高度な変態か貴様!」

「媚殿、褒めても何も出せないぞ」

「褒めてねえよ!むしろボクの方が全身全霊で蔑んでるよ!!」

「ああ、もつと愛して欲しい。媚殿・・・」

「みなさーん、始末に負えない変態がいますよー!!」

自分の身体を抱いて小刻みに震えてる様子とか普段のクールー（笑）と比べて

かなり可愛く見えるけど喋ってる内容で台無しだ。

「さて、冗談もそこそこに媚殿に伝えなければならぬ連絡事項があるわけだが」

「あ、冗談・・・冗談だよな。焦ったぞ」

「ソッチの趣味があることは否定はしない」

「其処が一番冗談になるべき所だ!」

「騒ぐな媚殿、話しが続けられない」

「今のは俺が悪いのか!？」

「深夜に騒ぐものでは無いだろう？」

「ソーデスネー、ほんつと原因が何を言う」

「明日から婿殿の学校に入る事になったそうだ」

おっと、どこからか電波が飛んできたようだ。何を言ってるのか理解できなかったぞ。

「・・・パードウン？」

「私と叶が君と同じ学校に通う事になったそうだ」

おや、日本語に聞こえる電波なんて珍しいなあ・・・あ、あははははは

「・・・リアリー？」

「よろしく、クラスメイト」

「何でそんな急に?! 金か、金の力か!!」

「ソレもあるけれど・・・その学校はうちが経営してるようなものだからさ」

「汚い、さすが大企業の娘、汚い」

「嫌だね、普段はこんな事はしないよ」

「なら・・・今回行使した理由を聞こうか」

「恋故に・・・かな」

「恥かしげもなく恥ずかしいことを言うんじゃない」

「愛しているよ、婿殿」

「棒読み過ぎる! 嘘でももうすこし真面目に言え」

「愛されてやろう、婿殿」

「お前が言われる側か!」

「とにかく、今更どう足掻いた所で再度の転入は不可」

「・・・ボクの平和な日常をかえそうか？」

「私達が転入した所で平和だよ、平穏ではなくなるだろうがね」

「僕は静かに暮らしたいんだ・・・!!」

「文句なら叶に言っしてほしい、今回の転校も叶からの指示だ。

何、問題があれば私が片付けるさ」

知り合いもいるしね、と笑って言っのける武装メイドさん。

・・・この人が片付けるって言うとな血を見そう嫌なんだけど。

「ああ、そうそう」

道場の壁から楽しそうに体育座りして微笑みながらこっちをみてる。

微笑んでいる。微笑んではいるけど同時になんか禍々しいオーラを纏ってる気がする。

「そういえば媚殿は信じられないくらいに弱いね」

「いきなり傷つくことを真正面から言うのやめて欲しいんだけど」

「本当に弱い」

「煩いな・・・」

「どうしようもなく弱い」

「弱くなきゃ鍛錬なんてするかぁー！！！」

まあまあ、と膝を立てたまま軽くなだめるように手を揺らすが・・・
ボクさ、コレ怒るべきだよな？

「大体僕だってそこそ強いんだよ？そりゃ殺し合いとかは未経験
だけど」

「そこなんだよ、重要なのは」

「・・・は？」

「実戦は現代日本で経験してる人なんてたかが知れている。

実質殺しあった人間が手を出してくることなどそうは無いさ・・・故に媚殿はもう少し殺意がない攻撃にも敏感になって欲しい」

「いや、殺意無しとか・・・そんな事あるか？」

「なければそこまでの力量を期待しないね、叶の媚殿」

「いや、日常生活で・・・そんなこと・・・」

「ふむ、受け取りたまえ」

そう言って急に太腿辺りをさらけ出して黒い棒状の何かを投げてる。

あわてて反射的に受け止めたものは護身用の警棒、ソレも伸縮するタイプの。

「ん・・・何で警棒？」

「今から実践して教えるからさ」

スカートをめくりあげたまま体育座りを続ける美月さん。

・・・さて、その体勢でめくりあげてると全部丸見えになってるから！！

「気にするな」

「無理だろ！」

「媚殿は節操無しのケダモノか？」

「断じてそういう訳では無い！」

「なら心の平静を保つ訓練だと思えば良い。色香に迷うな、というね」

「訓練と言うか、生殺しじゃ」

「勿論手を出したところで怒りはしないさ。ただ君の人生の終着点がどうなるかわからないけれど」

「くっ・・・そのつもりはないが、尚更に手をだせなく」

「ひとまずそれはおいておこう。今大事なのは殺意無き致死性の攻撃とはどういうものか、だ」

「ああ、普通そんなこと気にしないと思うけどね」

「婿殿、ここから少しだけまじめに聞いて欲しい」

「ん？」

深夜の道場で稽古中の男に警棒を指差しながら真剣な表情で語るメイドさん・・・シュールだ。

「その警棒。振り上げて、振り下ろせ」

「ああ、こう竹刀みたいに振り上げて（ぶつん）振り下・・・・・・す？」

何だ、今の効果音。

「それから手元の警棒、どうなっているかをよく見て欲しい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・切れてる？」

「では次に音がしたと思われる場所を見上げて」

「・・・・・・・・え、何も無いよな？多分、この辺・・・」

ふと手を伸ばすと、即座に美月さんから叱責の声が飛んできた。

「待て！手は伸ばさずに、そのまま上をよく見る」

「・・・・・・・・何が・・・」

道場の暗い天井を見上げながらよく目を凝らすと、かすかに光を反射する細いものが見える。

「何だ・・・これ？」

「私が使う武器だ」

「・・・ただの糸が？」

「勿論多少の細工はしているけれど、ね」

「・・・ただの釣り糸みたい、だけど」

「殺しに材料の質は余り関係無いさ」

目線を下に戻すといつの間にやら近寄ってきた美月さんが顔を寄せていた。

「少し緊張感が低過ぎる気がするね」

「あのな、僕は平和に生きてんの。此処は日本で戦場でも無いし」

「私がここまで近くに寄っていて、もし私が婿殿を消す気だったらどうするつもりかな？」

「ボクさ、そういう命のやり取りに興味が無いから笑うね。」

「と言うか消す気があるなら最初からこの糸もつと低く設定してるだろ」

「まあ、そうだけれど・・・私が変装した偽物なら油断させてから殺していたね」

「変装しないと殺せないような相手なら返り討ちだって」

「相手が慎重深いだけで実は強かったら返り討ち所の騒ぎじゃなくなるけれど」

「んー、でも美月さんも糸も怖いけど、種が割ればそうでも無いものじゃない？」

「こんなものはまだまだ序の口だけれど・・・まあコレ自体はその程度の扱いで十分な危険・・・だね」

苦笑しながら気の済むまで撫でてくる美月さんが可愛かったので（言動はあれだけど）

まあ、笑って殺すんだけどね。と言う台詞はさすがに言わなかった。

実戦で人は殺してないけど、ほんとには実行するくらいワケナイんだ

から。

これでも一応、実戦以外はマスターしてるんだ。精神面でも、肉体面でも。

＊ ＊ ＊

思考にこびりつく赤さを軽く行水で流し、ようやく部屋に戻る。

未だに布団で眠ってる叶さんを見て、何となく和む。

出会ってすぐ僕の平和を乱しまくりの人なのに、布団で安らかに眠っている顔だけはとっても可愛い。

ホント、起きてる時も大人しかったら可愛いのに。

一息ついて軽く頭を撫でも「はにゅっ」・・・ん？

今、変な鳴き声が聞こえたような。

構わず撫で続けてみる。

「はう・・・あう」

うん、明らかに人の声だな。

・・・って言うか明らかに叶さんの声だ。

眼を凝らしてみると妙に顔が赤くなってるし。

「狸寝入りか・・・コラ」

「ね、眠っていますが何か？」

「完全に起きてるじゃねえか！」

「気づいていたなら襲って下さいよ！さあ、かもーんです！」

「僕は眠いんだっていつてるだろ！！」

「私の愛を断るんですか！据え膳食わぬは男の恥ですよ！」

「知るかッ！」

「私とのことは遊びだったんですね！」

「実はそういうこと言いたいただけだろ！？」

そのまましようもない言い合いに時間を取られてしまい、結局僕が眠れたのは、夜が明ける寸前だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5174q/>

Killing Lovers

2011年7月10日13時01分発行